(2) 小麦とうなぎ－うなぎ屋さんが規格外小麦を？－

昭和56年、同58年は、小麦の収穫時期にちょうど曇雨天や長雨に遭遇、そのため著しい穂発芽粒が発生し、道産小麦は未曾有の悪評となりました。

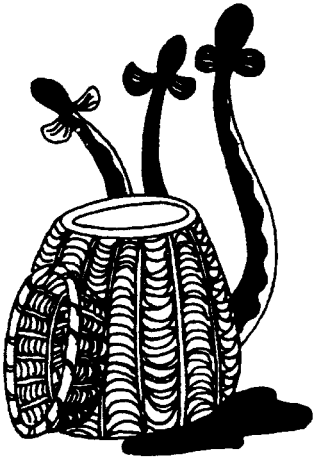
昭和56年は春から不順な気象で、全道的に生育は遅延傾向となり、成熟期も平年より７～10日遅れで、十勝、網走の収穫はいずれも８月中旬となりました。

そのため、十勝ではお盆前に収穫し始めましたが、当時は小麦が成熟しても、大半はお盆休みをする習慣になっていましたので、お盆あけにはほとんど穂発芽してしまいました。とくに主産地の十勝が著しく、10a当たり収量は88kgと低収でした（北海道全体では210kg、作況指数65）。

昭和58年は、ちょうど「チホクコムギ」が世にでて十勝、網走に約７％普及した年でしたが、「チホクコムギ」の欠点である「穂発芽に弱い」ところがでてしまったという有様でした。この年も昭和56年同様に、春以降の不順な気象により、生育が大幅に遅延しました。また、十勝の被害が大きく、収穫期のお盆後半に３日連続の大雨で、倒伏と穂発芽が重なり、収穫前の小麦畑が、緑のじゅうたんを敷いたようになったほ場がでてしまいました。もちろん商品としての小麦は少なく、小麦の姿をしていても、いわゆる低アミロ小麦として、規格外小麦でした。十勝の10a当たり収量は108kgで、北海道全体では274kg、作況指数81でした。これは道央の稲転地帯と斜網地区の小麦が、３日連続の降雨を回避したため、ほとんど穂発芽とならず、高収量に終わったため、全道収量が昭和56年のように大きく低下しませんでした。

この年全道で８万tの規格外小麦がでました。もちろんめん用小麦になりませんので、買い手を模索することになりました。そのとき本州のうなぎの養殖も手がけている業者さんが現れ、話題となりました。穂発芽小麦すなわち低アミロ小麦をうなぎが食べるのかと？　今ではかなりの業者さんが低アミロ小麦や大豆・でん粉等を取り扱っていますので、不思議はないのですが、当時は小麦の面積が年々増加し、規格外小麦が急激に発生したため、引き取ってくれる業者さん探しに苦労した頃の話です。最近では、低アミロ小麦が一部醸造用に使用されることが当たり前のようになっていますが、当時

は何に使用するのかわからず、うなぎ屋さんが、うなぎの餌にするのではないかと、想像力をたくましくしたものでした。

農家経済にとっては、規格外小麦になりますと、大幅な価格低下となるため、収入に大きく影響します。農家の皆さん方は、好きで低アミロ小麦にしているわけでありませんので、今後もできるだけ発生しないような管理をしなければなりません。一部に規格外小麦に依存している業界もありますが、中身が低アミロでなく細粒とか形質不良により、規格外となるものを使用していただき、低アミロ小麦による規格外小麦は避けたいものです。

＜佐藤　久泰＞